



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	市川健夫先生のご逝去を悼む（紙碑）( fulltext )
Author(s)	小泉,武栄
Citation	学芸地理(73): 1-2
Issue Date	2017-12-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/149289">http://hdl.handle.net/2309/149289</a>
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

## 市川健夫先生のご逝去を悼む

東京学芸大学地理学会名誉会員・市川健夫先生は2016年12月7日、逝去された。享年89歳。大往生であった。先生は1927年9月5日に長野県小布施町に生まれ、旧制の須坂中学校から1944年4月に東京高等師範学校に入学された。ここで先生の地理学との関わりが始まる。その後、先生は生涯を通じて地理学や風土や文化の研究を続け、現役の地理学者として亡くなられた。「地理学をやれば、人生2倍楽しくなる」は先生の名言だが、文字通り、地理学の研究を楽しんだ一生だった。まさに地理学者になるために生まれてきたような人だったといえよう。

先生は1948年に高等師範を卒業後、母校須坂高校の教諭となり、教育の傍ら地理学の研究を始めた。24歳の時に書いた最初の論文「長野県農業のあり方」は長野県知事賞特選となり、高額の賞金を受けたというから、いかに秀才だったかが分かる。1961年には『平家の谷 信越の秘境秋山郷』を出版され、長野県内で話題になった。私も秋山郷に近い長野県飯山の生まれなので、我が家にもこの本があった。私が最初に接した市川先生の本である。信州はその後も一貫して先生のフィールドであって、風土や産業、文化、民俗等に関する膨大な著作を刊行され、最終的にそれは『信州学大全』という形で結実する。また南アルプス山中の山村・下栗を「日本のチロル」と命名したり、北斎美術館を世に広めて小布施町の観光振興に寄与したりするなど、地域に関する貢献も大きく、小布施町の名誉町民にもなっている。

東京学芸大学に移られたのは、1973年4月、46歳の時である。大学発足以来、20年余りにわたって不動のメンバーで継続していた地理学教



室に、初めて新しいメンバーとして加わったわけで、赴任される時はさすがに緊張したそうである。しかし持ち前の楽天的で明るい性格もあってすぐに溶け込み、看板教授となっていく。私も5年後に助手に採用され、市川先生の講義を聴く機会を得たが、「さっきそうせったけんども」（さっきそう言ったけれども）といった信州方言丸出しの講義には、学生諸君も最初はよく聞き取れず、いささか戸惑っていたようである。しかし方言にも次第に慣れ、話が面白いこともあって後は熱心に聞いていた。

この頃の市川先生はまさに油が乗り切った感じで、雑誌地理などに連載記事を書くほか、毎年のようにあたらしい本を出版されていた。『雪国地理誌』、『日本のサケ』、『風土の中の衣食住』、『日本の馬と牛』、『日本のブナ帯文化』、

『ブナ帯と日本人』、『信州学ことはじめ』、『青潮文化論』などといった書名で、どうみても一人の人が書いたものとは思えない多彩さである。恐るべき好奇心の賜物といえよう。なおこれらの著作とは別に、東京学芸大学退官後にされた講演の記録や雑誌などに書かれた短文、新聞記事、エッセイ等が、市川健夫著作集『日本列島の風土と文化』（第一企画、全4冊）としてまとめられ、先生の考えたことのエッセンスを知る上で大変便利になった。

市川先生の著作や講演の基礎には、広範な読書に加え、フィールドでの観察や聞き取りで培った膨大な知識がある。しかしそれが単なる知識に止まらず、頭の中でこねあげられ、まったく新しい像の制作につながっていく点に特色がある。これは真似をしようと思ってもできな

い才能であり、教育によって身につけることもできない天賦の能力である。残念ながら先生一代限りと考えるしかないであろう。

先生はフィールドでの観察の達人でもあった。青潮文化の調査の際は私も同行させていたのだが、大学ノートに見たこと聞いたこと全てをびっしりと書きこんでいたのが、強く印象に残っている。おそらくそれが次の著作につながっていったのであろう。野外巡検での説明も名人芸といえるほど面白く、私たちは当時、冗談半分に、戒名は「地理院巡検居士」がふさわしいという話をしていた（さすがにそれは実現しなかったようであるが）。多分あの世に逝かれてもノートをもって野外調査をし、回りの人を相手に楽しく巡検をしているに違いない。先生のご冥福をお祈りいたします。（小泉武栄）